

終のステラ

Diary of a Faint Hope

Stella of The End

Even if humanity dies, the machines we have created
will inherit our love and create the future.

Diary of a Faint Hope

終のステラ

Stella of The End

Even if humanity dies, the machines we have created
will inherit our love and create the future.

レフ老年期

プロローグ

Prologue

Stella of The End

Even if humanity dies, the machines we have created
will inherit our love and create the future.

Contents

プロローグ	レフ老年期	page.03
#01	レフ 8 歳	page.05
#02	レフ 12 歳	page.11
#03	レフ 15 歳	page.19
#04	レフ 25 歳	page.27
#05	レフ 52 歳	page.31
#06	レフ 73 歳	page.35

私はレフ。

今年で82だか83歳だか、おそらくそのくらいになる。

苦難に満ちた人生だったはずだ。

貧しい村落で生まれ、最低限の教育しか受けてこなかつた。

労働力として酷使され、詩歌を吟じる喜びも知らず、ただ生きていた。

苦しみしかなかつた時代が、私には確かにあつた。

だがそれらの記憶すら薄れるほどの時が、私の上を過ぎ去つていた。

それらはとうに喉元を過ぎた熱さだつた。

野人に近かつた私が、あるひとつ出来事をきっかけに部族の長に選ばれ、

人々を導く大役を果たすことになつた。

やがて退き、隠居の身となつた今でも、あの時代のことは忘れる事はない。

彼女の姿は、今でも色鮮やかに記憶している。

だがそれすら永遠不变のものではない。

私が死ねば全てが消え失せる。

だから、そうなる前にここに記録として残しておく。

すべてはおおよそ70年前にはじまつた――

Stella of The End

Even if humanity dies, the machines we have created
will inherit our love and create the future.

#01

Chapter 1

レフ 8歳

22人だった。
男児12人、女児が10人。
最年長の私でも8歳。
彼はそれ以下だった。

共同体から追放された人間を野人と呼ぶが、今にして思えば、あれはそうした野人たちが集まつてできた集落だったのではないかと思う。

大人たちが皆似たり寄つたりの中年で、他の世代がおらず、あとは子供しかいないという年齢の偏りからはそう推測できた。

そこに生きる者たちに知恵や熱意など望むべくもなく、必然として私たちは貧しくその日暮らしに近い原始的生活を強いらってきた。

ある日のこと、村に略奪者がやってきた。
彼らは大人たちを的撃ちのよう射殺していった。

そして残された子供を捕まえ、奴隸として連行した。
殺されることは免れたが、だからといって丁寧に扱われたわけでもない。

全員が首輪をつけられ、鎖で二列に連結された。
私たちは事態を理解する暇すら与えられず、混乱のうちに家畜のよう繋がれ、引きずられていったのだ。

私たちの前後左右には髭の濃い男たちが、それぞれ5人ずつ歩いていた。

私たちの前後左右には髭の濃い男たちが、それぞれ5人ずつ歩いていた。

20人。うち5人が銃を持っていた。

略奪者たちだ。

私たちの前後左右には髭の濃い男たちが、それぞれ5人ずつ歩いていた。

殺されるとわかった。

だが私は男を睨み続けた。

鉈が振り上げられる。

車の起こりが数秒遅ければ、私はそのまま殺されていただろう。

後方を歩いてきた略奪者がひとり、音もなく倒れた。

次に左右を挟んでいた略奪者が、立て続けに倒れた。

3人とも銃を持っていた。

全てが無音で起つた。

数秒遅れて、3連続の銃声が大気を震わせた。

今ならわかるけど、それは音速を超えて射出された高初速の狙撃弾だった。

誰かが警告した。

前方にはまだ銃を持つた仲間がいる。

そのふたりの頭も無音で爆ぜた。

銃手から潰している。

「どこだ！　どこから撃つてきてる!?」

死体から銃を回収しようとした者が数名いた。

立て続けに射殺される。

精確な狙撃だった。

「誰か銃を回収しろ！」

「てめえが拾え！」

男たちは身を低くして怒鳴り合う。

狙撃者の姿は見えない。

どの方向にいるのかもわからない。

逆らうことでも逃げることも不可能だった。
「止まるんじゃねえ！」
誰かが後ろで叫かれた。

私は振り返ったところで、暴力を止めることなどできない。

あれはそうした野人たちが集まつてできた集落だったのではないかと思う。

共同体から追放された人間を野人と呼ぶが、今にして思えば、あれはそうした野人たちが集まつてできた集落だったのではないかと思う。

私は振り返らなかつた。

連れていかれた先でどんな暮らしが待っているのか、考えたくなかった。

大人たちが皆似たり寄つたりの中年で、他の世代がおらず、あとは子供しかいないという年齢の偏りからはそう推測できた。

そこには生きる者たちに知恵や熱意など望むべくもなく、必然として私たちは貧しくその日暮らしに近い原始的生活を強いられてきた。

ある日のこと、村に略奪者がやってきた。
彼らは大人たちを的撃ちのよう射殺していった。

そして残された子供を捕まえ、奴隸として連行した。
殺されることは免れたが、だからといって丁寧に扱われたわけでもない。

全員が首輪をつけられ、鎖で二列に連結された。

私たちは事態を理解する暇すら与えられず、混乱のうちに家畜のよう繋がれ、引きずられていったのだ。

私たちの前後左右には髭の濃い男たちが、それぞれ5人ずつ歩いていた。

20人。うち5人が銃を持っていた。

略奪者たちだ。

私たちの前後左右には髭の濃い男たちが、それぞれ5人ずつ歩いていた。

殺されるとわかった。

だが私は男を睨み続けた。

鉈が振り上げられる。

車の起こりが数秒遅ければ、私はそのまま殺されていただろう。

後方を歩いてきた略奪者がひとり、音もなく倒れた。

次に左右を挟んでいた略奪者が、立て続けに倒れた。

3人とも銃を持っていた。

全てが無音で起つた。

数秒遅れて、3連続の銃声が大気を震わせた。

今ならわかるけど、それは音速を超えて射出された高初速の狙撃弾だった。

誰かが警告した。

前方にはまだ銃を持つた仲間がいる。

そのふたりの頭も無音で爆ぜた。

銃手から潰している。

「どこだ！　どこから撃つてきてる!?」

死体から銃を回収しようとした者が数名いた。

立て続けに射殺される。

精確な狙撃だった。

「誰か銃を回収しろ！」

「止まるんじゃねえ！」

誰かが後ろで叫かれた。

私は振り返らなかつた。

連れていかれた先でどんな暮らしが待っているのか、考えたくなかった。

大人たちが皆似たり寄つたりの中年で、他の世代がおらず、あとは子供しかいないという年齢の偏りからはそう推測できた。

そこには生きる者たちに知恵や熱意など望むべくもなく、必然として私たちは貧しくその日暮らしに近い原始的生活を強いられてきた。

ある日のこと、村に略奪者がやってきた。
彼らは大人たちを的撃ちのよう射殺していった。

そして残された子供を捕まえ、奴隸として連行した。
殺されることは免れたが、だからといって丁寧に扱われたわけでもない。

全員が首輪をつけられ、鎖で二列に連結された。

私たちは事態を理解する暇すら与えられず、混乱のうちに家畜のよう繋がれ、引きずられていったのだ。

私たちの前後左右には髭の濃い男たちが、それぞれ5人ずつ歩いていた。

殺されるとわかった。

だが私は男を睨み続けた。

鉈が振り上げられる。

車の起こりが数秒遅ければ、私はそのまま殺されていただろう。

後方を歩いてきた略奪者がひとり、音もなく倒れた。

次に左右を挟んでいた略奪者が、立て続けに倒れた。

3人とも銃を持っていた。

全てが無音で起つた。

数秒遅れて、3連続の銃声が大気を震わせた。

今ならわかるけど、それは音速を超えて射出された高初速の狙撃弾だった。

誰かが警告した。

前方にはまだ銃を持つた仲間がいる。

そのふたりの頭も無音で爆ぜた。

銃手から潰している。

「どこだ！　どこから撃つてきてる!?」

死体から銃を回収しようとした者が数名いた。

立て続けに射殺される。

精確な狙撃だった。

「誰か銃を回収しろ！」

「てめえが拾え！」

男たちは身を低くして怒鳴り合う。

狙撃者の姿は見えない。

どの方向にいるのかもわからない。

「止まるんじゃねえ！」

誰かが後ろで叫かれた。

私は振り返らなかつた。

連れていかれた先でどんな暮らしが待っているのか、考えたくなかった。

大人たちが皆似たり寄つたりの中年で、他の世代がおらず、あとは子供しかいないという年齢の偏りからはそう推測できた。

そこには生きる者たちに知恵や熱意など望むべくもなく、必然として私たちは貧しくその日暮らしに近い原始的生活を強いられてきた。

ある日のこと、村に略奪者がやってきた。
彼らは大人たちを的撃ちのよう射殺していった。

そして残された子供を捕まえ、奴隸として連行した。
殺されることは免れたが、だからといって丁寧に扱われたわけでもない。

全員が首輪をつけられ、鎖で二列に連結された。

私たちは事態を理解する暇すら与えられず、混乱のうちに家畜のよう繋がれ、引きずられていったのだ。

私たちの前後左右には髭の濃い男たちが、それぞれ5人ずつ歩いていた。

殺されるとわかった。

だが私は男を睨み続けた。

鉈が振り上げられる。

車の起こりが数秒遅ければ、私はそのまま殺されていただろう。

後方を歩いてきた略奪者がひとり、音もなく倒れた。

次に左右を挟んでいた略奪者が、立て続けに倒れた。

3人とも銃を持っていた。

全てが無音で起つた。

数秒遅れて、3連続の銃声が大気を震わせた。

今ならわかるけど、それは音速を超えて射出された高初速の狙撃弾だった。

誰かが警告した。

前方にはまだ銃を持つた仲間がいる。

そのふたりの頭も無音で爆ぜた。

銃手から潰している。

「どこだ！　どこから撃つてきてる!?」

死体から銃を回収しようとした者が数名いた。

立て続けに射殺される。

精確な狙撃だった。

「誰か銃を回収しろ！」

「てめえが拾え！」

男たちは身を低くして怒鳴り合う。

狙撃者の姿は見えない。

どの方向にいるのかもわからない。

私にとつて、彼女の語る内容は半分も理解できないものだつた。

ただ少なくとも、彼女に私たちを虐げるつもりはないことは確かだ。

殺すつもりなら簡単に殺せただらうし、奴隸として連れて行くなら拘束を解く必要はない。無学ながらそのことを感じとつていたので、私は助けを乞うた。

彼女はその場で火を起こし、簡単な食事を振る舞つてくれた。

「じゃあ村に連れ戻してあげても、もう自活の手段はないんだね?」

「はい……ぼくたちだけだと、生きられない」

彼女の問いかけに、私はたどたどしく答える。

他の者は粥をすることに夢中で、話す余裕もない。

そもそもまともに人と会話できる者が、私しかいない。

「これ……もつと」

空の器を手に、7歳のアイラが話を遮つた。

「おかわりね、はい」

アイラはなみなみと粥の注がれた器をかつさらうように持ち去つた。

それを皮切りに、他の子供も我先にとおかわりを求める。

フィリアは苦笑いをして、順番によそつてやる。自分は口にしない。

私は手元の器に目を落とした。

まだ半分ほどが残つている。

暴力的な食欲がわきあがり、残りを一気に流し込んだ。

これでは他の者と同じだと恥じつつも、食欲には抗えなかつた。

飢えていたことがあるが、これほどうまいものを今まで口にしたことことがなかつたのだ。

山間を清流が走る、風光明媚な土地だ。

「どこが村?」

アイラが言つた。声には失望の色が混じついていた。

見事な景観だが、大自然以外に何もない。

「今はなきけど、これからできるかもね」

フィリアが笑うと、その背後、今まで山腹に隠蔽されていた

鉄扉が可視化した。

皆がどよめく。

「恐がらなくていいよ。この世界で一番安全な場所のひとつだから」

そう言つて、私たちを施設の内部に誘つた。

「大昔の軍事施設だよ。規模は小さいけど、君たちが当面暮らすには不自由ないとと思う」

基地には広大な地下空間と自給設備が揃つていた。

備蓄物資もあり、水源も近かつた。

大人用の軍服のみだが衣類もあつた。

フィリアは水耕栽培システムを稼働させ、その管理を一部子供たちに任せた。

それまで食うや食わざの原始生活をしてきた半野生児のような私たちだから、最初のうちは慣れない仕事に戸惑うばかりだつた。だが屋内の仕事は安全で、野外で食糧を探してうろつき回るよりはずつとましであつた。

私たちの誰もが、子供ならではの柔軟さで新生活に馴染んでいた。暮らしは落ち着くと、すぐにフィリアは教育に着手した。教育。

「うまいです、これ」

「ありきたりな保存食だけど。みんな、いつも何食べてるの?」

「本の実、たまに魚。あとは草とか草……どうしても食べるものがないときは、虫も」

「畑は?」

「やつてなかつた。最初試したけど、すぐうまくいかなくなつたつて大人たちが」

「……人間は大変だね」

「え?」

「ううん、こっちの話」

食欲が満たされると、子供のうち何人かはその場でうずくまつて眠つてしまつた。

強行軍でかなりの疲労がたまつてたのだ。

「この近くに遺跡があつてね。こちらでスカベンジングする時はよく拠点に使つてるんだけど。暮らしやすいとは言えない。け

ど、いくらかの物資なら蓄えてある。そこに来る?」

断る理由はなかつた。

仲間たちとともに生き残るために、フィリアの助けが必要だつた。

体力のない子供を連れての移動は、フィリアにとつてもかなりの負担だつたろうが、彼女は少しもいやそうな顔は見せなかつた。

見た目とはそぐわない、どこか底知れないところが、フィリアにはあつた。

旅は半月ほどにも及んだ。

清らかな水と、洗練された学問で、私たちは育つた。

数年後には、全員が読み書きを修得するところまで私たちは文明化された。

他のどの居住地でも、これほどの学びはなかつたはずだ。

フィリアが活用したのは高度に体系化された教育プログラムであり、それはかつての文明人たちを生み出す源泉のひとつに違ひないものだ。

辿り着いたのは、渓谷の地だつた。

今の私があるのも、この教えのおかげだ。

時代を考えると最高水準の教育だつたのではないかと思う。

他のどの居住地でも、これほどの学びはなかつたはずだ。

フィリアが活用したのは高度に体系化された教育プログラムであり、それはかつての文明人たちを生み出す源泉のひとつに違ひないものだ。

清らかな水と、洗練された学問で、私たちは育つた。

数年後には、全員が読み書きを修得するところまで私たちは文明化された。

そして全員が、集団生活で何かしら専門の役割を担うようになつっていた。

この時期までのフィリアは、本当に良きリーダーだつた。

いつまでも私たちを導いてくれるものだと誰もが思い込んでいた。

「ぼくがリーダー?」

「そう」

「フィリアがいるのに?」

「私は顧問になる」

冗談だと思った。いくらなんでも早すぎる。

本気だつた。

リーダーに指名された翌日から、あらゆる相談事が私のものと舞い込むよくなつた。

こうした実践の苦勞が、人を育てるのとをすでに私は知つていた。

だから懸命に取り組んだ。

私は機会を与えてくれた彼女の采配には、感謝するしかない。だがそれでも、本音ではフィリアにリーダーをやつて欲しかつた。そうすれば、彼女はいつまでもここにいてくれただろう。

今になつて考えてみれば、フィリアは最初から引き継ぎを想定して動いていたよう思う。

性急とも思える教育や、自給自足を促すような仕事の割り振り。

彼女だけが、基地での生活に根を張ろうとしていなかつた。

様々な必要を充たしてはくれるが、それ以上に踏み込んでくることはない。仕組みは教ても、是非は押しつけない。

たとえば母が子に教えるような、正しい在り方について、フィ

リアは一度も教えてはくれなかつた。人として大切なことや、隣

人を大事にする意義だとか、そういうことをだ。

つまり、こういうことである。

フィリアは聖母になることを避けていた。

子供たちの何人かは、彼女のそうした態度に距離感を覚えた

のだろう。長ずるにつれて、嫌うということではないが、自立

を志向するようになった。

特にアイラは、フィリアに強い対抗意識を持つていた。

教えを挑戦とどらえて、意地を張るように学んでいた。

だから年長組の中で、アイラはもつとも優秀な成績を修めた。

9歳になつた時、彼女は電気科学関連のテキストを唸りながらむさぼりはじめた。

急いでその知識を体得する必要があると、感じていたのだろう。

一方、私は指導者として経験を積んでいた。

しかし成績だけで評価するなら、上からせいぜい2番手か3

番手であり、アイラのように得意分野と呼べるものもない。最も優秀な者はいえなかつた。

ある時、私はフィリアに談判した。

当時はそのことでかなり悩んでいたのだ。

「最年長というのも理由のひとつだけど、君がみんなの中でもちばん冷静で視野が広いからだよ。調整型のリーダーに向いてる」
淡い劣等感が、淡雪のごとく溶けていった。
一部の口が悪い者は、レフはフィリアの崇拜者だと笑う者もいたし、そのことで私自身悩みもしたが、やがて気にすることをやめた。

誰に恥じる必要もない、事実だったからだ。

子供だけの国の基盤は、こうして厚みを増していく。

諍いやトラブルは常に尽きなかつた。時には殴り合いになつたことすらある。

だとしても、あれは幸福な少年時代であつた。

レフ 12 歳

#02

Chapter 2

Stella of The End

Even if humanity dies, the machines we have created
will inherit our love and create the future.

時が流れた。

私は12歳になっていた。

生活拠点はあいかわらず基地内であつたが、この頃になると周辺の土地には小規模な畑が広がりはじめていた。

どれほど施設が充実していようと、一生閉鎖空間にこもることは難しい。野外に活動域を広げることは精神衛生上の観点からも、必要なことだつた。

「うん、いいね。よくできる」

皆ではじめて建てた丸太小屋は、ひどい出来だつた。

各所に隙間があつたし、暖炉を作つたのに煙突の加工を忘れていた。

扉はサイズを間違えていて完全には閉まらず、閉じるにはロープでくくるしかなかつた。唯一褒めて良いのは床が水平なことだけだ。

そんな出来だと、フィリアは称賛してくれた。

「見栄えはともかく、作りが頑丈でいいよ。一番大切なことを重視できたね」

建築に携わった子供たちも、そこまで褒められると満面を和らげた。

私は素直に喜ぶことはできず、自分たちの年齢を思い返していた。

工作機材を存分に活用したとはいえ、平均年齢10歳の子供にできることがどうか?

できるはずがない。自分たちはついこの間まで、ごく原始的な生活をしていたのだ。

これは明らかに、一線を超えた成果だつた。

「噂だよ。みんな気にしてる。最近になって軍事訓練がはじまつたから、たぶんそのせい」

軍事訓練。

銃の撃ち方、偵察のやり方。敵味方の識別方法。

それらすべてにかかる、監視システムの運用法。

初期の頃、基地に保管されていた銃器や爆発物に触れることは禁止だつた。

狩獵も偵察も、すべてフィリアがひとりで受け持つてた。

ところが最近は、そうした軍事面の仕事すら子供に割り振らうという気配だ。

他の男子たちは大はしゃぎだつたが、私は素直には喜べなかつた。

全ての教えが終わつた時、フィリアは……。
運び屋という存在のことも、今やよく理解している。

世界にはまだ人口密集地があり、そこでは残り火のようないくつもの文明社会が生き残つてゐるのだ。

フィリアは文明世界から来た。確かに彼女の才能なら、どこででも引く手あまただらう。

そのことを考へると私は心臓を驚びかみにされた気分になつた。

「レフでも聞いてないの?」

「……ああ」
「リーダーなのに、変だね」

フィリアの教えがあればこそだ。
だけど、と思った。

すべてを自力で解決できるようになった時、フィリアがここにとどまる理由もなくなつてしまわないだろうか?

「アイラ、一番難しい仕事をよく覚えて、お手柄だつたね。これからもオペレーターをちよくちよく任せせるから、よろしくね」

「わかつてる」

無表情にアイラは答えた。

彼女はフィリアに対していつもこういう態度をとるが、与えられる仕事や教えを拒んだことはない。貪欲な学びの姿勢。

「レフはどうしたの、難しい顔して」

「……この小屋に収穫物を保管できるかな?」

「うん、その予定だつたけど、隙間があるから食糧は置かない方がいいね。ここは見晴らしもいいし、詰所にしたらどうかな。中継用の通信装置を置いてさ。どうリードー?」

「それでいいと思うよ」

「えーと、じゃあミハイルとボリー、運ぶの手伝ってくれる? 設定も教えるから」

担当分野を持つことが生きるために大事。そういう教え方をフィリアはしている。

3人が基地に向かうと、アイラが歩み寄つてきた。

「ねえレフ、フィリアが遊び屋に戻るって話、ほんと?」

「……誰から聞いたんだそれ?」

ちょっとの悪意を感じる言い方だった。

だが悪意の内訳まで当時の私には読み解けず、むしろその通りだなどと同意していたくらいだった。

そう。大事な話なら、自分にだけはいち早く教えてくれてもいい。

そのように思つていた。

大事な話をいち早く教えてもらえたのだった。

「近いうちに街に行きたい。行つて戻るまでだいたい二ヶ月。そ

の間、レフたちだけでやっていけそう?」

思つていたら実現した。

叶つたら叶つたで、それは受け入れがたい事だつた。

確かに皆の言う通り、私はフィリアを崇拜しそうだつたかもしれない。

「無理です」

上がつてきたし、緊急時は基地に立てこもれば誰も入つて来られない。不可能ではないと思う

本心は別にして、嘘はつけなかつた。

「いいや。足りない物資を仕入れてくるだけだよ。出ていった

りしないよ」

「フィリアはここを出していくつもりなの?」

なら運び屋は廃業して、ずっとここにいてくれるのか。

本当にしたかった質問は口にできなかつた。

「それ、僕もついてつたらダメ?」

「いきなり外部集団と接触するのはおすすめできないかな。予防接種だってまだ全然進んでないし。そのあたりも含めて、まだ調達物資が不足してんだけよね」

「……僕らには病気に対する免疫がないって話だよね。でもフィリアは他の街を渡り歩いてきたんだから、もう大丈夫なんじゃない？」

「フィリアは珍しく、目を丸くして私を見つめた。

小さく「おお、するどい」とつぶやく。

そして少し思案すると、

「みんながこれから先、外の集団とまったく接触しないなら今まででもいいんだけどね。そうはいかないはずだよ」

「どうして？」

「ここがいつか街になつたら、私以外の運び屋や移住希望者が来るから」

「街？　ここが？」

「君たちが今、調子でやつていけたら、いずれそうなるよ」

想像ができないかった。

都市や街、大勢の人間が暮らす様子は、映像資料で繰り返し見た。

「だけどそれらは全て昔話だ。一種の神話である。」

「我々がどれだけ頑張ろうが、あのようになるとは思えなかつた。考えられる所したら、それはただひとつ。」

「それ……遠い未来の話なんじゃなくて？」

「そうでもないよ。私の感覚だと」

フィリアは少し寂しげに、私の頭を撫でた。

数週間後、フィリアは街を出発した。

小型機械のVerだ。
そのあとを追いかける。

Verの行き先に、その所有者がいた。

その姿を目にして、私はやつと安堵できた。

「レフ、約束通り戻ってきたでしょ？」

良かつた。戻ってきてくれた。とても嬉しい。

「……何泣いてんの。バカじゃないの」

隣に立つたアイラが、苛立ちを隠しもせずに言つた。

「うるさいな……いろいろあるんだよ」

「泣き虫」

吐き捨てて、自分の仕事に戻つていくアイラ。

丁寧に涙をぬぐつてから、両の頬を叩いて気合いを入れ、フィリアに歩み寄つた。

「レフ、おつかれさま。よくグレープをまとめたね」

「なんとか維持しただけだよ。フィリアがいなくて大変だったよ」

「そう？　さつきアイラと話したけど、うまくやつてたみたいじゃない。私の助けがいらなくなる日も近いってあの子反り返つてたけど」

「アイラの反抗期っぷりには感心する。恩知らずにもほどがある。」

「物資のリスト、転送するよ」

「端末にデータが着信。確認する。」

「すごい。どうやってこれだけ集めたの？」

「一部現物通貨も使つたけど、ICだね」

「IC？」

私は慣れないライフルをかついで、途中までの道を随伴した。記憶にはないがこの時、私は周間に自分たち以外誰にもいのをいいことに、かなりみつともない事を言い続けていたよう思う。本当は行つて欲しくないとか、危険だとか、心細いとか、そういうことをだ。まるで母親に甘える子供だ。

「心配いらないよ。あの場所に街があると、未踏の地を探索するのに便利なんだから。何度も戻つてくるよ」

それは、いつかフィリアが運び屋稼業に戻るという意を意味する言葉だつた。

予告通りの二ヶ月後、それはやつてきた。

大量のコンテナと檻を満載した、節足動物のように一列に連続させた台車だ。

物資だつた。膨大な量の。

基地では入手できない各種医薬品や、農作物の種子、調味料、しかし台車は自動運転のよう、フィリアは搭乗していなかつた。

彼女の姿を探し求める。

家畜化された鳥をはじめて目ににして、興味津々ケージをのぞきこむ仲間たちの横を素通りする。

台車の制御部位にドッキングしていた小型機械が、連結を解除して自走していく。以前に見た時より大型化しているが、独特のカラーリングとディテールは、フィリアの連れている自動

「情報通貨。相場と紐付けされた情報。大きな街で大きな買い物する時はだいたいこれ」

「お宝のありかでも教えるの？」

「それに近いよ。危険な土地の情報や、単純な地図も売れる。こちらの土地をマッピングしたら、レフだってすぐ小金持ちになれるよ」

「ぼくは街では生きられないよ。生き方も知らない。それに……大人ってこわいし」

「じゃあこの話の続きは、レフが大人になつてからするよ」

「何年も先だ」

「すぐだよ」

すぐ大人になる。すぐ街になる。

フィリアはたまにこういう言い回しをした。

まるで年月が、あつという間に過ぎ去つてしまふと言わんばかりだつた。見た目だけならフィリアだつて、私たちとそう変わらないはずなのに。

「……これでもう用事は終わり？」

「そうだね。しばらくはみんなを手伝うつもり」

他人事のような言い方。

いざとなれば、フィリアが自分たちのために命掛けで戦つてくれることはわかってる。決して無責任なわけではない。

だが言動の端々に滲む距離感は、私を心細くした。

「ちょっとフィリア！　荷台に知らない子供が寝てるんだけどどう？」

「あ、忘れてた！」

アイラのもとに走つていくフィリア。

呼び止めようとして、やめる。

未熟であつても子供であつても、それでも私はリーダーだつた。

もうフィリアに甘えてばかりもいられない時期が来ているこ

とを、理解しつつあつた。

さて、養鶏によつて生活はさらに豊かになつたが、仕事も増えた。

村で暮らしていた時も野鳥は貴重な食糧であり、鳥肉はご馳走だつた。

家畜化された鶏や卵の味は、それらとは比較にならない格別

のものだ。

鶏小屋は増設され、周辺には宿舎が建てられた。

結果、基地外で寝泊まりする者が増えた。

「様になつてきたね。上から眺めるとよくわかるよ」

基地の最上階から出ることのできる、岩壁に偽装された掩蔽壕

から眼下一帯を眺め、フィリアが言つた。

渓谷を抜けて広がる土地には、小屋が点々と散らばりはじめ

ていた。

工作機材と設計済みデータを活用したテンプレート建築だけ

に、どれも同じようなつくりではあつたが、最初のものに比べて仕上がりは格段に良くなつていて。

「少し基地から離れすぎなのが気になるけど」

フィリアの隣で同じ光景を眺めていた私は、別のことと一緒にしていた。

……襲撃された時、すぐ基地に逃げ込めない今の状態はいろ

フィリアが連れ帰つた3人の幼子。

彼女は3人の素性について、

「荒野で拾つちゃつた」

としか説明しなかつた。

皆戸惑つたが、自分たちの過去を考えれば文句など言えない。

誰が面倒を見るかで、多少揉めた。

全員それなりに忙しい立場だつた。

余計な苦労は背負い込みたくない、というのが共通の本音だ。

そんな中、率先して面倒を見る役目を引き受けたのがアイラだつた。

「アイラって姉御肌の才能があるよねえ」

最初、フィリア以外にはなかなか心を開かなかつた子供たちを、アイラは短期間で手懐けてしまつた。

そういうことができる子だと思つていなかつた私は、少し驚いたものだ。

「アイラはぼくより優秀だから、そのうちリーダーの座を取られるかも」

「ないない。100%ない」

「そうかな……いや、そうなつたらなつたで全然いいんだけど」

「アイラはレフを支えたいんだよ」

「ええ？ 嘘だよ。むしろバカにされてる」

「アイラは責任感ある人間を馬鹿になんてしないよ」

「どうなのかな」

「だからふらふらしてゐる私はあまり好かれない。アイラはレフに協力的な子だよ」

「そうなのだろうか」

いろと不安がある。

「こちらの土地 자체が未踏の地で侵入者はほとんど来ない。監視網もちゃんと運用できる。そこまで心配はいらないよ」

「心配のは、いざつて時にちゃんと対処できるかどうかだよ。銃だつて訓練してるけど、ちゃんと撃てるかどうかわからないし……。だから本当はみんなにはできるだけ一箇所に固まつて暮らしてほしいんだ」

「私も最初は撃てなかつたなあ」

「フィリアでも？」

「全然。私に銃を教えてくれた人に、よく怒られたよ」

フィリアが誰かに怒られたり、銃を撃てずにまごついてる姿

が想像できない。

「だいたいのことは時間と経験が解決してくれるよ。ここが何者かの襲撃を受けることがあるとしても、それはまだ大いぶ先のことになるはずだから。心構えと訓練だけは欠かさないでおいてね」

フィリアが眼下の基地に向かつてやつて来る少女を見つけて指さした。

「赤い服を好む彼女の姿は、遠くからでもよくわかる。

「さつそく子分たち引き連れちゃつて」

微笑ましげに笑う。

アイラの背後に幼子が3人、連なつて歩いている。まるで水鳥の親子だつた。

「新人の子たち、アイラによく懐いてくれたね」

自分の目線だと、そこまでの印象はない。

自分の仕事をきつちりやってるな、くらいである。

「よく話しあつて、街を育てていつて欲しいな」

「……フィリアがリーダーならすぐ育つよ」

「うーん、私には私でいろいろ仕事があるからねえ」

「運び屋つて引退できないの？ 危ない仕事なんでしょう？ イヤにならない？」

「危ない仕事だけど、イヤではないよ。運び屋つてのは聖なるごろつきだと思ってるよ」

「街と街の間を運び屋が行き來することは、今の人たちにとつてすごく大きなことでね。たとえばレフたちが暮らしていた村みたいに少数で孤立した集落つて、どんなに頑張つても独力じゃ生活水準がどんどん落ちていくんだ。で、最後には子供を育てる余裕すらなくなつて……えてしてひどいことが起ころ」

フィリアは話ながらアイラに思い切り手を振る。

壕内にいるフィリアと私に気付いたアイラが、ぶいと顔を背けた。

「そう。集団生活に馴染めなかつた人とか、一攫千金狙いとか、そういう人たちが多いからね。でもたとえ動機が山師めいてて、私利私欲でも、運び屋が来ることで見えない恩恵がもたらされる。虫がそよとは知らず花粉を運ぶようね」

フィリアの説明は、この時の私には完全に理解することはで

きなかつた。

理解したくなかったのかもしれない。

「それに私は定住向きじゃないから」

「そんなことない。本当はみんなファイリアにリーダーやつても
らいたいんだ」

「ありがとう。でも今だけだよ、そんな意見が出るのは」

「ファイリアがここに住むことを嫌がつてるのは知つてる。けど
命の恩人だ。英雄だ。そんな人に率いてもらいたいんだよ、み
んな本音じゃ。ぼくだってそうだよ！」

私が突然、強い語調になつたことにファイリアは一瞬目をぱち
くりさせたが、すぐ寂しげに笑つた。

「イヤつてわけじゃないんだよ。理由あつての判断だよ」

「理由つて？」

「……いつかわかるよ、レフたちにも」

「ああ、やはりそうだ、と悲しく思った。

彼女との間に壁がある。見えない壁が。

誰も立ち入ることのできない、確固たる一線。

信頼されていないのか。それほど気にかけられてないのか。ど
うでもいいと思われているのか。今までファイリアから得た助力
を考えれば、有り得ない想像ばかりがよぎつた。

私はごまかしの言葉と受け取つたが、この予言は何年も過ぎ
てから成就することになる。

レフ 15歳

#03

Chapter 3

Stella of The End

Even if humanity dies, the machines we have created
will inherit our love and create the future.

私は15歳になっていた。

「……ごめん、この子たち見てあげて」

「……」

「……」

「また拾ってきた！」

「ごめんねアイラ。どうしても見捨てられなくて」

「だからって多すぎ！ わざと見つけに行ってるんじゃないの!?」

「おかげで誰も結婚していないのに、人口は年々増え、50人を超えていた。

「そんなことないよお。ごめんねえ。その分、頑張つていろいろかき集めてきたからさあ」

謝罪に反省の色がないことを私は見抜いた。

「おそらくまだばんばん連れてくるつもりなのだ。

「うん、次からはそうするよお」

弟妹たちに自分の仕事を少しでも割り振るため、教育をはじめた結果だった。

「この街で一番忙しいのはわたし！」

アイラが叫ぶ。フイリアが笑う。

実際に楽しそうな笑顔だったことを覚えている。

人が増えたことで需要も増した。

結果、フイリアが調達に出る頻度も高くなつた。

往復にかかる期間も増え、一度街を出ると何ヶ月も戻らなくなりた。

私たちはフイリアなしの暮らしに順応するしかなかつた。

そして彼女の持ち帰る物資は、確かに有用なものばかりだつた。

自力で貰えないものを調達してくれるフイリアの存在は、街には不可欠だ。

しかし彼女が連れ帰る孤児の多さには、閉口した。

新しい仲間が加われば、予期せぬ仕事も増える。

フイリアは口ではごめんごめんと言ひながらも、毎度毎度必ず子供を連れてきた。

ある時には、ついには年長組と同世代の者まで連れてきてしまつた。

「チュンだ。なんでもやる。仕事と、食い物をくれたら」

やつてきた男女3人は15、6歳といったところ。私と同世代だつた。

多少の危機感を覚えたが、こちらを威嚇する様子は見られないと。

やつてきた男女3人は15、6歳といったところ。私と同世代だつた。

過酷な環境で暮らしてきたのだろう。

みすぼらしく、痩せ細つていて、弱々しかつた。

「フイリアに与えられた真新しい衣服の下からは、かさぶたと垢で荒れた皮膚がのぞいていた。鞭のあともあるようだ。

かつての私たちもこうだった。人口70人。

話し合い、受け入れることを決めた。

連れてこられたのが大人であつたなら、いかにフイリアの頼みであつても快諾はできなかつたろう。同世代だから、かろうじて呑めた。

そうした先住者の心理も、フイリアは考慮していたのだと思う。

つまり、少しづつ連れてくる人間の年齢層を高くしていた。私たちの成長に合わせて。

「ここにリーダーをやってるレフだ。よろしく頼む」

「本当に仲間に入れてくれるのか？ こんな立派などこに……」

目にはまだかすかな怯えが宿つている。

「ああ、人手不足なんだ。暴れたりしなぎりや歓迎する」

「ありがとう…… 同い歳くらいなのに、すごいんだな君たち」

急に感極まつて涙を流しはじめた。

そして、数年前にフイリアと交わした会話をふと思いつ出した。

ここがいつか街になつたら、私以外の運び屋や移住希望者が来るからだよ——

さらに時が流れ、生活の拠点は完全に地上に移つた。

わずか2年で、基地周辺の景観もすっかり村落らしくなつた。

私たちは基地に依存しない生活に移行しつつあつた。

この頃では基地は倉庫や入浴施設として活用される程度だつ

「フイリアに与えられた真新しい衣服の下からは、かさぶたと垢で荒れた皮膚がのぞいていた。鞭のあともあるようだ。かつての私たちもこうだった。人口70人。話し合い、受け入れることを決めた。

連れてこられたのが大人であつたなら、いかにフイリアの頼みであつても快諾はできなかつたろう。同世代だから、かろうじて呑めた。

そうした先住者の心理も、フイリアは考慮していたのだと思う。

つまり、少しづつ連れてくる人間の年齢層を高くしていた。私たちの成長に合わせて。

「ここにリーダーをやってるレフだ。よろしく頼む」

「本当に仲間に入れてくれるのか？ こんな立派などこに……」

目にはまだかすかな怯えが宿つている。

「ああ、人手不足なんだ。暴れたりしなぎりや歓迎する」

「ありがとう…… 同い歳くらいなのに、すごいんだな君たち」

急に感極まつて涙を流しはじめた。

そして、数年前にフイリアと交わした会話をふと思いつ出した。

ここがいつか街になつたら、私以外の運び屋や移住希望者が来るからだよ——

さらに時が流れ、生活の拠点は完全に地上に移つた。

私は17歳になつた。

「……」

「わめきながらも子供を引き受けたアイラに、フイリアはばつが悪そうに笑いかけた。

「だからって多すぎ！ わざと見つけに行つてんじゃないの!?」

おかげで誰も結婚していないのに、人口は年々増え、50人を超えていた。

「そんなことないよお。ごめんねえ。その分、頑張つていろいろかき集めてきたからさあ」

謝罪に反省の色がないことを私は見抜いた。

「おさらくまだばんばん連れてくるつもりなのだ。

「うん、次からはそうするよお」

と言つて次には8人を引き連れてくる。

ついにアイラは機械技師と託児所に加え、教師の仕事も兼任するようになつた。

弟妹たちに自分の仕事を少しでも割り振るため、教育をはじめた結果だつた。

ついにアイラは機械技師と託児所に加え、教師の仕事も兼任するようになつた。

弟妹たちに自分の仕事を少しでも割り振るため、教育をはじめた結果だつた。

「この街で一番忙しいのはわたし！」

アイラが叫ぶ。フイリアが笑う。

実際に楽しそうな笑顔だったことを覚えている。

た。

「……」

人不在のため、かわりに私が名付けを頼まれた。

ふたりの新生児が生まれた。

誰もが感慨深くそのことを喜んだ。

母親たちはフイリアが名付け親になることを希望したが、本

よいよ事情が違つてきた。

早熟な者が出産しはじめたのだ。

ふたりの新生児が生まれた。

誰もが感慨深くそのことを喜んだ。

母親たちはフイリアが名付け親になることを希望したが、本

よいよ事情が違つてきた。

ふたりの新生児が生まれた。

誰もが感慨深くそのことを喜んだ。

今やフイリアは年に一度、戻つてくるかどうかだつた。

安全のため長距離通信を避けがちなフイリアの安否は、實際に戻つてくるまでわからぬ。

『レフ、ちょっと来てくれ。3番やぐらだ』

秘匿性の高い短距離通信が、私の端末に届いた。

通信は傍受される危険があり、秘匿性の高いものであつても使用は推奨されない。

ということは、重大なことが起きたのだ。

現場ではチュンが遠方を凝視していた。

『どうしたんだ？』

「来てくれ」

こここのやぐらは、完全木造でふたりが乗ると少々揺れる。これはよほどのことだな、と覚悟して梯子をのぼつた。

「あれだ。見えるか？」

チュンが指さしたのは、遙か遠方、森林地帯である。

目を凝らす。

森の中を黒く小さな影が移動しているのが、かろうじて判別できた。

「解析は？」

「すまん、俺は機械は苦手で……」

私は自身の端末を通じて、対象を画像解析にかけた。

端末の分解能などかがしれたものだが、フィリアから提供された得た膨大な過去データがある。類似ケースと照合することで解析精度は飛躍的に高まる。

「大型機械だ、あれ」

「やっぱりそうか。あれが……」

鉄の怪物、悪魔、巨大兵器……呼び方は地域によって違うが、運び屋たちはあれらをシンギュラリティマシンと呼ぶ。

「どうしたらしいんだ？ どうしていきなりここに現れた？」

「いや、いきなりじゃない。ああした機械はもともと何十年もかけて自分の繩張りを巡回するらしい。新参者はこっちの方だ」

「俺たち見つかったかな？」

「これだけ開拓してる以上、存在は察知されても不思議じゃない……けど、こっちから手を出すべきじゃない」

たとえ仲間を踏み潰されたとしても、巨大機械にだけは手を出すな。

普段はのほほんとしているフィリアが、こと機械関連となると厳しい物言いをしたことを思い出す。

「こっちに来ないなら、その判断で正しいみたいだな」

私やチュンのように外界で生まれ育つた者にとっても、シン

ギュラリティマシンというのは滅多に遭遇するものではない。

私は考えた。

今まで見ず知らずの人間にこの場所を知られないように暮らしてきた。フィリアの勧めでもあった。

そのフィリア自身が、よそ者をここに送った。

もう隠れていては前に進めない時期が来た。そのように解釈する他なかった。

「一晩くらい休んでいいたらどうですか？」

「俺に依頼したいことでもあんのかい？」

「いえ……今は特にありませんが」

「じゃあ稼ぎにはなりそうにねえな。今日は引き上げるとするぜ」

ここにはまだ大人への恐怖を克服できていない者もいる。正直ありがたい申し出だった。

みでくれは武装したならず者だが、プロ意識を持つた運び屋であるようだ。

「俺はこここの場所を他に漏らしたり、手勢を連れて勝手に発掘したりは禁止ってことでお嬢ちゃんと契約したが、そっちからの依頼がありや話は別だ。よけりやあ、たまに顔を出させてもらつても構わねえか？」

居合わせたアイラとチュンが、揃つて私を見た。

「普段はどのあたりで活動されますか？」

「そいつは地図で確認した方がいい。今、発信した。見られるかい？」

近距離信号を発信した、という意味だった。

危険度については正直のところ、よくわからないことだった。そうはいつてもあれほど巨大なものだ。脅威ではある。もしマシンが街に入り込むようなことがあれば……たとえばアイラあたりなら、率先して銃をとり、立ち向かいそうである。

最近はフィリアの教えを受けていない住人も増えてきた。

住人全員が守るべきルールに、このことを書き記さなければならぬと感じていた。

そななことがあってからしばらく、私が19歳になった頃だ。

ひとりの運び屋が街を訪れた。

武装した数名で、来訪者を取り囲んだ。

威圧とも取れる行為だが、安全が確認できるまではこうするしかなかつた。

だが相手は、この態度にも怯えた様子は見せなかつた。

「おいおい整つなよ。敵意がない証拠として、隠蔽を解除した

状態で來たろ。俺はフィリアってやつからの依頼で來たんだ」

男は運び屋であり、普段はもっと遠い地で活動しているのだ

と説明をした。

「話を聞いちやあいたが、本当に街があつて驚いたぜ。若いのに立派なもんだ」

「フィリアは戻つてこないんですか？」

私は訊ねた。

「ああ、向こうでかい仕事にかかりきりだ。ここに届ける物

資があるってんで、俺が代理で預かってきた。持つてつてくれ。

にしても、こんな僻地によく居を構えたもんだな」

男はロボットではなく、動物に荷を運ばせてきた。

端末を取り出す。

男が目頭、どういった土地でどんな仕事を請けているのか、地図情報込みでまとめていた。

鶴呑みにするなら、なかなか実績を積んだ運び屋であるようだ。

「なるほど……是非またおいでください。次までには宿くらい建てておきます」

「酒が飲めると嬉しいんだが」

「それは来る時にあなたに調達してもらう必要がありますね」

男は笑つて、手を差し出した。握手をする。商談成立だ。

「よかつたの？ 勝手に決めちやつて」

男が去つたあとでアイラが訊いてきた。

「そろそろ外との交易も視野に入れるべきだからね。頃合いだよ」

「あの大人、信頼できるのか？」とチュン。

「フィリアの紹介みたいなものだし、筋は通してくれるさ。もし情報が漏れても僕たちは基地に避難できる。過剰な警戒をして得損なう方が損失だ」

「そうちかもな。これからを考えるなら」

「フィリアももう本業に戻つたようなもんだし、自分たちのことは自分たちです。いいと思う。それでこそリーダーよ、レフ」

アイラが上機嫌で肩を叩いてきた。

運び屋は予告通り、半年に一度程度の割合でやってきた。

短い滞在期間でこちらの暮らしづぶりを観察し、不足しがちな品々を持参してきた。

たとえば衣類だ。

全員が基地から回収した軍服をひとつめたり切つたりして着用しているが、外の人間から見ると明確な商機であったようだ。

「さすがに高いんじゃない？　ただの布でしょ？」

「商品ってのは材料だけでできるわけじゃないんでね。それ

に見てくれよこの柄。華やかな格好をしてると、気分だって良くなるもんさ。恋愛成就の御利益もあるしな」

「そうなの!?」

「効果のほどを考えてみてくれ。くすんだ軍服と花柄ワンピー

ス、どっちが男の気が引けるかをよ」

「……これはいかほどなの？」

「そうだな。通貨でもいいがあんたらは使ってないよな。資源

か、こちらの地図でいいぜ」

「地図となると私ひとりの持ち物じゃないから無理よ」

「ボスにまとめて買い取つてもらって、皆で分配するって手もあるぜ？」

ふたりが私を見た。

提供した地図が転売されるにしろ男が仲間とともにスカベンジングに向かうにしろ、街の存在は複数の同業者間で知られることになるだろう。

「うなれば、どうなるかを考えた。

良くないことも時には起こるだろう。だが全ての揉め事を避けていては、自滅が待つばかりだ。

「いいですよ、地図。でも衣類や雑貨だけだとちょっと割に合わないかな。いくつかバーツをつけてくれませんか」

「ふうん、そういう交渉のやり方もお嬢ちゃんに習ったのかい？」

「いえ。でも古い小説だと、こんな風に値切っていたから」

「レフ、『さん』は立派な町長になりそうだな。あんたへの先行

投資もコミで、まけとくよ。バーツの内訳はあるかどうかがうど

して、そら、これはもうあんたらのもんだ」

集まつていた少女たちが歓声をあげる。

「そういやこの街、名はあるのか？　人に話す時にや、正式な地名があるといいが」

「ここは……渓谷街といいます」

「そうなの？　といった声が少女たちの間からこぼれ聞こえた。皆には申し訳なかつたが、私が独断で決めた名だつた。

最初は『フィリア』と名付けるつもりだつた。

それを寸前で思いとどまつて、とりやめた。

自意識の成長が未熟な心に追いついたことに、感謝してもらいたい。

とにもかくにも、こうして我が街に運び屋たち訪れるようになつた。

私は彼らと話し合い、得た利益の一部を街に還元してもらう

かわりに、街全体で活動を支援する取り決めを交わした。

宿舎、食事、医療、情報などの提供を受け、運び屋たちは周辺地域に散つていつた。

彼らは危険な土地であろうが構いなしに飛び込み、資源や

情報、科学文明の遺産などを持ち帰つた。

我々が根を張つた土地には、手つかずの遺跡が多数残されていたようだつた。

発掘物の恩恵で街はさらに発展した。

訪れる者は増え、彼ら向けに商売も成立するようになつていつた。

皆が懸念した通り、運び屋の中にはならず者同様の者もあり、多少の揉め事は起きたが、チュンを長とする警備班がよく取り締まつてくれた。

「おまえら若えのに暴れ者を制圧するのは妙に手慣れてやがるな」

ある運び屋が、チュンたちの手際をそう褒めたことがある。

対人制圧訓練は、フィリアが特に重視して教えたことのひとつだ。

機械に立ち向かうことは禁じたが、人を無力化する訓練だけは重点的に仕込まれた。確かにこれは、我々に必要な技術だつたのだ。

そうしてついに、本格的な移住希望者すら現れるようになつた。子連れの家族が数グループ、移住希望の打診があつた。

大人に怯える時期は過ぎていた。我々自身が、もはや大人になりつつあつた。

移住希望者の受け入れを決めた。

初期からの仲間が20歳を過ぎてくると、皆が競うように結婚はじめた。

人口はさらに増えていった。

この時期は、何か浮き立つような空気が街全体を覆つていたことを覚えている。

想像以上の衝撃に襲われた。
言葉も返さず、飛び跳ねる心臓とともに駆け出した。
本通りを走り抜け、正門の監視所まで来た。

多少呼吸は乱れていたが、まだ走る余力はあるつもりだつた。
「レフさん、どうかしましたか？」

少年は入出記録を確認する。

「ええと……ああ、つい40分ほど前に出て行つますね。運び屋の女の子ですかね？　俺よりちょっと上くらいの……」

それまで軽かつた肉体が、突然重みを増したように感じられた。

麻痺して気付かなかつただけで、とうに体力の限界だったのだ。

フィリアが私の顔も見ずに去った。

その事実に打ちのめされた。

私は頬れた。

あまりの精神的苦痛に心臓が止まりそうだった。

私にとって生きる理由の全てだった存在に、裏切られたと思つ

た。「フィリア、どうして……！　僕はあなたのこと……」

呻き声が、喉の奥から絞り出された。

長く癒されることのない絶望に、私は沈んでいった。

#04

Chapter 4

レフ 25歳

Stella of The End

Even if humanity dies, the machines we have created
will inherit our love and create the future.

「おめでとう」

背後から唐突にかけられた声に、私は作業の手を止めた。

「アイラに子供が生まれたんだって？」

基地内、データセンター。

渓谷街の近距離ネットワーク網を運用するための設備だ。

最重要施設であり、この存在は一部の者しか知らないし、入

れない。

勝手に入れないよう隔壁も閉じられている。

しかしフィリアなら、易々と突破するだろう。

数年ぶりの再会だった。

私の心は千々に乱された。

「……子供のひとりくらい生まれもするよ。あれから何年が経つたと思つてるのはかな？」

刺々しい言い方になつてしまふのを抑えきれない。

あれから5年ほど経過しても拭い切れずにいる絶望の残滓が、

私の感情を昂らせる。

「うーん……1年くらい？」

呆れて言葉を失つてしまつた。

ぶつけ損なつた感情を吐き出すようにコンソールに手を叩き

つけて、私は振り返った。

そこに……記憶の中と寸分違わぬ姿で彼女は立つていた。

その姿に心が持つて行かれてしまつた。

「会わずにいなくなつたことはごめん。私も顔くらい見ていきたかつたんだけど……でも他のみんなと話して、全員立派に自

立しててる様子を見たら、もう君たちは大丈夫なんだつて思つて

ぶつけ損なつた感情を吐き出すようにコンソールに手を叩き

つけて、私は振り返った。

そこに……記憶の中と寸分違わぬ姿で彼女は立つっていた。

その姿に心が持つて行かれてしまつた。

「会わずにいなくなつたことはごめん。私も顔くらい見ていきたかつたんだけど……でも他のみんなと話して、全員立派に自

立しててる様子を見たら、もう君たちは大丈夫なんだつて思つて

そうだ……新しい世代もまた、疑念を抱く日が来る。
一部の者で秘密を隠したところで、何の解決にもならない。

私は言葉もなく顔を伏せた。

「私つて、伝説の救い手なんだつて？」

「……そういう噂になつてしまつたんだ」

「でも伝説の救い手が、まさかこんな若いなんて誰も思わないよね。絶対におかしいと思うし、きっと不安に思う子も出てくるよ」

その通りだつた。

救い手がいつまでも変わらぬ姿で、何十年と居続けたなら……。

「良くないことが起つて。きっとね。今のレフならわかるよね？」

必ず戻つてくる」

「……うん」

「……それ悪いんだけど、今回の物資、ちょっと代価もらつていい？ 別件の仕事で入り用になつちやつてね。倉庫に眠つておるオールドデバイスをいくつか引き取りたいんだけど……大

丈夫だよ、ボラないからつ」

私はなんとか笑顔を作つて、彼女に向かつた。

その後、子供たちはすくすく成長していった。

豊かで満ち足りた生活をしたせいか、よくいえば滌刺、悪く

ね」

たつた一つの謝罪と期待の言葉で、怒りが立ち消える。

「それにしてもレフ、父親の顔になつたね」

顔をのぞきこんでそう言った。

渓谷街の近距離ネットワーク網を運用するための設備だ。

最重要施設であり、この存在は一部の者しか知らないし、入

れない。

勝手に入れないよう隔壁も閉じられている。

しかしフィリアなら、易々と突破するだろう。

数年ぶりの再会だった。

私の心は千々に乱された。

「……子供のひとりくらい生まれもするよ。あれから何年が経つたと思つてるのはかな？」

刺々しい言い方になつてしまふのを抑えきれない。

あれから5年ほど経過しても拭い切れずにいる絶望の残滓が、

私の感情を昂らせる。

「うーん……1年くらい？」

呆れて言葉を失つてしまつた。

ぶつけ損なつた感情を吐き出すようにコンソールに手を叩き

つけて、私は振り返つた。

そこに……記憶の中と寸分違わぬ姿で彼女は立つつていた。

その姿に心が持つて行かれてしまつた。

「会わずにいなくなつたことはごめん。私も顔くらい見ていきたかつたんだけど……でも他のみんなと話して、全員立派に自

立しててる様子を見たら、もう君たちは大丈夫なんだつて思つて

ぶつけ損なつた感情を吐き出すようにコンソールに手を叩き

つけて、私は振り返つた。

そこに……記憶の中と寸分違わぬ姿で彼女は立つつていた。

その姿に心が持つて行かれてしまつた。

「会わずにいなくなつたことはごめん。私も顔くらい見ていきたかつたんだけど……でも他のみんなと話して、全員立派に自

立しててる様子を見たら、もう君たちは大丈夫なんだつて思つて

いえば危機感のない世代となつた。チュンはそのことをよく嘆

いている。

しかし、それが平和というものだつうと私は思う。

街はさらにも拡大し、気付けば老若男女が住まう土地となつて

いた。

フィリアは完全に表舞台から姿を消した。

その名が入出記録に書き込まれることはなくなつた。

しかし……ほんの時折、痕跡を察知することはある。

数年後、街が大規模な武装集団に狙われたことがある。

この時は、全市民が基地内に一斉避難する事態にまで陥つた。

敵は正面の入り口を封鎖すると、出入りする旅人を殺すか奴

隸にして、物資を奪つた。

隘路を塞ぐ形でキャンプを設置し、さながら攻城戦の構えだつた。

渓谷という地形の都合上、正面を塞がれると外部とのやりとりは遮断される。渓谷の後方から逃れても峻険な山岳地帯に入るだけで、数百人の市民に生存の目はない。

さすがに私も頭を抱える事態であった。

武装集団の頭目らしき仮面をかぶつた半裸の大男が、正門の

向こうから降伏勧告らしき言葉をわめき立てるストレスフルな

日々が続いた。

その武装集団が、突然撤退したのである。

こちらは何もしていない。

引き上げていくならず者たちを、市の義勇兵が追撃した。

彼らはキャンプが巨大機械に襲われている様を目撃した。

ならず者たちは恐慌状態だった。彼らのどんな武器も、巨大

機械には通じなかつた。仮面の頭目は巨大機械に踏み潰されて死んだ。

巨大機械は去ると、破壊され尽くしたキャンプの跡地だけが残つた。

奴隸にされていた人々もすでに何者かに救出されていた。

彼らは安全な場所に逃がされていて、一様に「女の子に助けられた」と口にした。

その少女は、名乗らなかつたという。

一部の者だけが、その正体を薄々察した。

彼らはみだりに喋らなかつた。

それが彼らなりの、彼女に対する恩義だつた。

#05

Chapter 5

レフ 52 歳

Stella of The End

Even if humanity dies, the machines we have created
will inherit our love and create the future.

息子と口論になり、家出をされてしまった。

運び屋になりたいというのが青年の主張だった。私は説得を

試みて、失敗した。

アイラはショックで寝込み、こちらは酒量が増えた。

今回の危機には、「彼女」の救いも期待できそうになかった。

そんなある日、酒場である噂話を耳にした。

「アンドロイドつてのが、人類社会にまぎれこんでいるらしい

んですよ」

酔っ払いにふさわしい、荒唐無稽な話だ、と思った。

だが続きを聞くにつれ、次第に暗雲めいた感情が心を覆いはじめた。

「すごく精巧で、見た目はまつたく人と見分けがつかないそうです。だけど歳は取らず、ずっと若い姿のままです」とか

頭の中で、さまざまな情報が符合していく。

「ここからだいぶ南に行くと、天まで届く塔がうつすら見える

んです。私は実際に見える土地から引っ越してきました。嘘ではありませんよ。それは私が生まれるほんの少し前に、突然現れ

たんだとか。で、どう見ても高度な建築物だってんで、東部あたりじゃ南方調査の機運が生まれたそう……」

実際に、南方文明とおぼしき遺跡が次々に発見されたのだと男は説明した。

男の時期からだと言う。

アンドロイドの噂が、囁かれるようになつたのは。

「そしてついにアンドロイドが発見されたってんですね。居住地にまぎれこんでいたところを捕まつて……無事、ぶつ壊され

たつて」

私の酔いはもうすっかり冷めてしまつていた。

「いやあ、機械が人類社会に潜んでいるなんて恐ろしい話ですよ。じゃ私はこれで失礼しますよ」

待て待て待て。

アンドロイドは敵なのか、と問いつめると、

「そりゃあスパイなんですから、敵でしょうよ。きっと人類を乗っ取ろうとしているに違ひありませんや。実際のところ、私や

それが怖くてここまで移住してきました。根拠？ さあ難し

い話はさっぱりで。ただみんなそう言つてますんでね、きっと

危険なんですよ」

文明人の末裔とは思えぬ、迷信じみた思考だった。

だが大衆とはこういうものだ。数十年町長を続けてきた私はそれをよく知つている。

理解できないものを人は恐ろしいと思う。当然の感情だ。

だから、一所に留まるべきではないのだ。怯えさせてしまうから。

彼女は聰明だった。

その教え子である私も、そうであろうと思つた。

だが、私ひとりが聰明であらうとしても、どうにもならぬこともあつた。

一基の巨大機械が、渓谷街の近くを徘徊していることはよく知られている。

2、30年周期で周回している巨人機械で、全高数十メートル。

渓谷街とのかかわりは今まで一切ないものの、時期が来ると

「街が滅びる」だの「人類は絶滅する」といった終末論が流行るだけである。

今まで、機械の活動圏である西の大森林は、まつたく開拓の手が入ることはなかつた。そこを開拓していくれば、いずれは巡回ルートに接触することになるからだ。

だが近年、土地事情が悪化し、森林開拓が議論されるようになつてきた。

議会は開拓推進派と慎重派の間で荒れに荒れた。私は慎重派だつた。

巨大機械にだけは手を出すな――

フイリアの教えを考えれば、当然の結論だつた。

だが大半の人々は今、機械を敵対的な存在として見る傾向にある。

しかし慎重派は不利な立場である。

人々も私の弱腰な態度にはかなり批判的のようだつた。

そうして私の根回しも虚しく、森林開拓計画は議会を通り、大勢の運び屋と技士が雇用されるに至つた。

民主主義の原則であるからには、これ以上の異議を唱えることはできなかつた。

実際、当面の間は大きな問題は出ないだろう。

だが遠い将来……たとえば次の巡回周期と、開拓地が接触したら？

頭の痛いことである。

もつともその頃まで私が生きていられる保証もない。

機械憎悪が出るのはしかたのないところである。

渓谷街の人々は知つているのだ。

機械が時には人を虐殺するものだと。

レフ
73
歳

#906

Chapter 6

Stella of The End

Even if humanity dies, the machines we have created
will inherit our love and create the future.

さらに時が流れた。
街は大いに発展した。

今や多くの人々が流通する、北部の一大拠点と呼ばれている。
今はただの一市民である。

皆、死んでしまった。

最初期からの仲間たち。ミハイル、ボリー、マナド、リエツタ、イーシャ、チーン……そしてアイラも。

私が最後のひとりとなってしまった。

街に出れば、華やかな衣服をまとい、教育を受け、将来の夢を持つた若者たちが歩いている。かつては想像することすらできなかつた、豊かな暮らししがそこについた。

ここ数年は、私のことを覚えている者も減り、ひとりで歩いていても声をかけられることは少なくなつた。

それで良い。

人生で果たすべき仕事のだいたいは終えたのだから。

ただふたつだけ心残りがあつた。

ひとつは息子との不仲を解消できなかつたこと。だが息子自身がもう自分の家庭を持ち独立している以上、今さらの問題である。

残るひとつは、フィリアのことだ。

死ぬ前にもう一度だけ、会って話をしてみたい。

未練というわけではないのだ。

ただ私の人生は、フィリアとの出会いからはじまつたと考えている。

全てを終える前に、一度話をしたいだけなのだ。

叶うだろうか。叶わぬだろうか。

老いた私の日々は、この淡い希望によって彩られている。

ところが、

最後の最後で、大きな問題が立ち上がつてしまつた。

数十年ぶりに接近しつつあつた巨大機械「クレムニク」が、西

進しきつた開拓地の眼前で擋坐したのである。

「今後の發展を目指す上で、開拓を阻むまいましい巨大機械を排除することは急務であった。このことを原因として、議会は数十年以上に渡つて、推進派と慎重派にわかれ対立してきた。だが諸君、我々の飛躍を押しとどめる古きものを取り除く、絶好の機會が訪れた！ 我々はここに義勇団の設立を宣言する！」

16歳から60歳までの体力壮健な男女の全てに参加資格がある！ 街の未来のために、諸君の助力を期待する！」

街中でこのような街頭演説が耳目を集めることも、珍しくなくなつた。

いわゆる志願兵である。

平和な小世界に育つた世代の多くが、老いた鉛重な巨大機械など恐れない。

そこに危機感を覚えるのは、私のような古い者だけである。その古い世代も、今やこの世界を立ち去ろうとしている。

市民は街のいたるところで話し合つた。

酒場では夜な夜な、いかに機械を破壊し解体し、資源化するのかといった計画が討議された。

この大事業を成し遂げた後、街にもたらされる好景気ばかりが夢想された。

傍観していることはできなかつた。
私は気力を振り絞り、市軍本部に出向いた。
警備に止められたが、かつての身分を振りかざすと困惑されながらも応接室に通された。
やがて荒々しく扉が開き、立派な身なりをした壯年の男が、部下も連れずに現れた。

「どういうつもりだ、親父」

「クレムニクに手を出すな。おまえが民意を誘導して、いることは知つてゐる」

我が息子は、警備隊を母体とする市軍組織の将校である。

「……証拠はあるのか」

「いくらでも出せる。知つてゐるだらう」

「お得意の電子諜報か？ あなたのやり口は、今じゃ犯罪行為だ！」

「おまえが民衆を指嗾していることもそつただらう」

男は苦々しげに父を睨みつけた。

「なぜ街が発展する好機に水を差す！」

「シンギュラリティマシンに手を出せば街が滅ぶからだ」

「それは古い考えだ。今の渓谷街の軍事力をもつてすれば、老いた機械など敵ではない」

「今の数百倍の軍事力でもあれらには叶わない。そして一度でも敵対すれば終わるだ。マシンはこの街そのものと敵対してしまつ。彼女の残したデータをおまえも目にしているはずだ」

「また救いの手の話か！」

息子は苛立たしげに机を叩いた。

「あんなものは嘘つぱちだ！」

移動能力を完全に喪失。各部に発火・放電、発光などの異常現象も見られた。

その後9日間の観測で、自己修復機能が働いていないことを確認。

巨大機械は機能停止に陥った……と判断された。

だが彼らは巨大機械——シンギュラリティマシンというものを、まるで理解していなかった。

初動の攻撃が行われた。

炸薬ではなく原始的な実体弾兵器ではあったが、基地施設でサルベージ生産されたもので、高速な自走能力はないものの、絶大な破壊力を有していた。

立て続けの命中弾を受けたクレムニクは、即座に活動を再開した。

破損した部位を切除、残存部位に喪失箇所の機能を担わせる形で……つまり脚部を切り離して、両腕で地面を這うにも似た発想で、移動力を回復する。

再起動したクレムニクは、包囲陣に突撃を敢行。

地べたを逃げ惑う兵隊を踏み潰しながら、敵性集団識別のため高出力観測波を周辺一帯に放射した。

敵個体群の関係性を観測・集積・解析することで、統計的に関連付けることが可能だ。

たとえば「同じ軍服を着ている」「装備が同一である」「構成物質・組成・運用が同質である」「後方からの支援を受けている」「同じ文化圏に属している」「遺伝的に近しい集団である」などは統計に出やすくなる。

このようにして、たとえば攻撃を仕掛けってきた集団の所属母

掛けてくる。

出陣したはずの息子も生きてはいまい。

渓谷街は皆で作った街だ。

私たちの人生における、全ての良い記憶がこの地に染みている。

「すまない、みんな」

破壊は免れまい。

だがせめて、次世代には繋がなければならない。

私は再び議会に足を向けた。

紛糾しているであろう会議の席で、忘れ去られた老人の提案が通るだろうか。

いや、通さねばならない。

でなければ、アイラたちに申し訳が立たなくなる。

半日後

市民の一斉避難が開始された。

兵士のひとりが、真新しい装備を差し出す。

「ですがこんな銃一丁では、どうにもならないのです?」

「護身用だよ。お守りみたいなものさ。使うことはないだろうがね」

私が議会に乗り込んだ時、そこではのんきにも戦後処理や、死んだ兵士の遺族補償についてふんぶんたる議論が繰り広げられていた。

体を判別することもできるようになる。

あとは受けた攻撃の深刻度から、どの程度まで反撃を行うかが決定される。

クレムニクは非常に不幸なことながら、短気かつ徹底的な性格をしていた。

虐殺がはじまつた。

壊走した義勇軍の一部が街に帰還した。

腕や脚が潰れた者、顔が焼けただれた者、指向性エネルギーに曝された者。

診療所のベッドが足りるはずもなく、多くが公園にそのまま転がされた。

惨憺たる有様だった。

腕や脚が潰れた者、顔が焼けただれた者、指向性エネルギーに曝された者。

22時間後、全市民の避難が完了した。

少數の偵察要員が監視塔に配属された以外は、街には私がひとり残るだけとなつた。

これが策だった。

やつてきたクレムニクに一発でも銃撃を当れば、自分にヘイトを向けることができるだろう。機械は街に残るたつひとりの老人に攻撃を行い、他に武装した民間人を見つけられず、高確率で報復プロセスを完了させるだろう。

物的被害は出るだろうが、人々は救われるはずだ。

私自身が死んでしまうことがこの作戦の欠点だが、向こうで仲間たちに再会した時、情けない報告をするよりはましだ。

街を一望できる高台で、私はクレムニクの到着を待った。

知らずに寝こけてしまつた私は、不意に予感のようなものを感じて目を覚ました。

すぐ背後に、懐かしい気配があつた。

「レフ」

私は呻いた。

ゆっくりと振り返る。そこに、いた。

記憶と寸分違わぬ姿の彼女が。

私は自分が老人であることすら忘れた。

まるであの時代に戻つたかのようだつた。

心細さと憧れのあいまつた奇妙で浮ついた感情が、数十年ぶりに老体を痺れさせていた。

「……良かった。最後にあなたに会いたいと思つて……」

フイリアが凍り付いたような目で私を見下ろしていた。

これほどまでに無機的な顔を、はじめて目にした。

「未熟者！」

腹の底からの一喝が、私を打つた。

「自己犠牲の授業なんて、私は一度もしてないよ！」

私の策などどうにお見通しなのだとわかつた。

「だけど……他に手がないんだ」

「まだ時間には猶予がある。模索する時間くらいはあつたはずだよ」

「生き足搔く理由が必要なんだ」

「逆だよ。そんな歳になってまで、幼稚な結論を出した。……未熟者の証拠だよ」

「それは、あなたののような存在だから言えることだ！」

フイリアの強い眼光が、かすかに揺らいだ。

「……私はね、たとえ誰かを助けるためであつても、安易に自己犠牲にして欲しくないの」

「君たちに教えた知識と技術なら、命を使わざとも人を守れるはずなんだ」

「私の時代ならそれができたと思う。でも、もう私は過去の人間になつてしまつた。彼らの選択がいかに愚かなものであつたとしても、それを止めることは難しかつたよ」

だから、体を張つて行動するしかなかつた。

「間違つてるよ、レフ」

「私も教えを次世代に残そうとした。だが……うまくはできなかつた。子供たちには叶う限りの教育をしたつもりだが……反発を招いてしまつたようでね」

フイリアは口をつぐむ。

「彼女ですら、最後まで救世主でいてくれないことを無責任だと指弾されたのだ」

話したいことは山ほどあつた。

だが本人を前にして、それだけで心が充足してしまつていた。
「こんな野晒しで申し訳ないが、お茶でもご馳走しよう」

コントロに火をつけようとしたところで、

「何言つてゐるの。そんなことしてると暇はないよ。はやくクレムニクの所に行かなきや」

「だが……すでに戦闘行為は行はれてしまつてゐるし……」

「大丈夫。手はある。ないのは時間だけ。だからレフ、最短ルートで案内して。0から索敵している暇も惜しいから」

驚いてフイリアを見上げる。

「何言つてゐるの。そんなことしてると暇はないよ。はやくクレムニクの所に行かなきや」

「不幸な私たちに、安らぎを与えてくれていた。

目尻から、アイラが世を去つて以来の、熱いものが零れた。

彼女の手助けができるというなら、生き恥をさらすくらいはどういうこともなかつた。

私が先導し、そのあとにフイリアと、見かけるたびに少しずつ大型化しているV e 「が続いた。なぜ大型化しているのだろう。道中の会話でそう疑問を口にしたら、「成長期だから」という冗談めいた説明をされた。

顔をこちらに向けた時には、冷静で穏やかなあのフイリアだった。

そこには彼女に教えた何者かがいるのだろうか。

それにしても、本当に変わつていない。

時を止めていようが、魔法だろうが、あるいは噂されていた

ようなアンドロイドであろうが、そんなことはどうでも良いことだ。

最後にもう一度会えた。

それだけで充分である。

「私が最後のひとりとなつたよ、フイリア。皆を代表して、礼を言わせてもらう」

「……どういたしまして」

顔をこちらに向けた時には、冷静で穏やかなあのフイリアだった。

軍が作った道を活用し、夜が明ける頃には現地に入ることができた。

そこにはまだ残存部隊が留まっており、予想外にもまだ軍事的秩序を維持していた。

「親父！なぜここに!?」

「残存部隊を率いるのは、生きていた息子だった。まさか、助けに来たなどと言うまいな」

「私はただ彼女を連れてきただけだよ」

息子はフィリアを一瞥した。

「……運び屋か。若いな。志願兵ということでもなさそうだが」

「もしかして、最後の特攻をかけるつもり？」

「正解を言い当てられて、息子は苦い顔をする。勝算があるなら止めないけど、その火力じゃ無理だよ」

「流しの運び屋風情に何がわかる！」

「総兵力はたったの69人。でも無駄死させるには多すぎない？」

「なぜそれを」

「正確な数の指摘に、息子はたじろぐ。索敵」

自分の端末をひらひらと振った。

「腕はあるようだが、まさかあんたらじや無理だ自分がかわるとでも言うつもりじやあるまいな」

「あんたらじや無理だ私がかわる」

「馬鹿にしているのか！」

「自分で振ったくせに……」

「すまない、息子は冗談を言うのも言われるのも苦手なたちで……」

「それじゃあ先行偵察に志願しようか。索敵は得意だよ」

「やめろ！」

「本當か？」

「驚きに目を見開く。市民全員の避難はそう簡単ではないと考

えたのだ。

「これは時間稼ぎの戦闘だ。偵察の必要すらない」

「私にはクレムニクを止める手立てがあると言つても？」

「何!?」

「どのよう手段でだ?」

「簡単に説明するけど、マシンに命令できるアクセスコードを持てる。それを使つて報復プロセスをキヤンセルする」

「本当か? ならそれをこちらに渡してもらおう。タダとは言

わん。高額報酬を約束する」

「いよ」

「嘘をつくメリットは私にもレフにもない。醉狂で命は賭けないよ」

「無理。私しか使えない」

「……そもそも、その話は事実なのか?」

「嘘をつくメリットは私にもレフにもない。醉狂で命は賭けないよ」

「親父! なぜここに!?」

「私はクレムニクを止める手立てがあると言つても?」

「何!?」

「どのよう手段でだ?」

「簡単に説明するけど、マシンに命令できるアクセスコードを持てる。それを使つて報復プロセスをキヤンセルする」

「本当か? ならそれをこちらに渡してもらおう。タダとは言

わん。高額報酬を約束する」

息子は鼻で笑った。

「これは時間稼ぎの戦闘だ。偵察の必要すらない」

「私にはクレムニクを止める手立てがあると言つても?」

「何!?」

「どのよう手段でだ?」

「簡単に説明するけど、マシンに命令できるアクセスコードを持てる。それを使つて報復プロセスをキヤンセルする」

「本当か? ならそれをこちらに渡してもらおう。タダとは言

わん。高額報酬を約束する」

「無理。私しか使えない」

「……そもそも、その話は事実なのか?」

「嘘をつくメリットは私にもレフにもない。醉狂で命は賭けないよ」

「親父! なぜここに!?」

「私はクレムニクを止める手立てがあると言つても?」

「何!?」

「どのよう手段でだ?」

「簡単に説明するけど、マシンに命令できるアクセスコードを持てる。それを使つて報復プロセスをキヤンセルする」

「本当か? ならそれをこちらに渡してもらおう。タダとは言

わん。高額報酬を約束する」

「無理。私しか使えない」

「……そもそも、その話は事実なのか?」

「嘘をつくメリットは私にもレフにもない。醉狂で命は賭けないよ」

「親父! なぜここに!?」

「私はクレムニクを止める手立てがあると言つても?」

「何!?」

「どのよう手段でだ?」

「簡単に説明するけど、マシンに命令できるアクセスコードを持てる。それを使つて報復プロセスをキヤンセルする」

「本当か? ならそれをこちらに渡してもらおう。タダとは言

わん。高額報酬を約束する」

「無理。私しか使えない」

「……そもそも、その話は事実なのか?」

「嘘をつくメリットは私にもレフにもない。醉狂で命は賭けないよ」

「親父! なぜここに!?」

「私はクレムニクを止める手立てがあると言つても?」

「何!?」

「どのよう手段でだ?」

「簡単に説明するけど、マシンに命令できるアクセスコードを持てる。それを使つて報復プロセスをキヤンセルする」

「本当か? ならそれをこちらに渡してもらおう。タダとは言

わん。高額報酬を約束する」

「無理。私しか使えない」

「……そもそも、その話は事実なのか?」

「嘘をつくメリットは私にもレフにもない。醉狂で命は賭けないよ」

「親父! なぜここに!?」

「私はクレムニクを止める手立てがあると言つても?」

「何!?」

「どのよう手段でだ?」

「簡単に説明するけど、マシンに命令できるアクセスコードを持てる。それを使つて報復プロセスをキヤンセルする」

「本当か? ならそれをこちらに渡してもらおう。タダとは言

消えた。

装備の力を借りた、瞬間的な筋力強化によるものだ。瞬間移動でいた加速で地を駆け、私とクレムニクの間に飛び込む。

なぜかはわからない。

シンギュラリティマシンの攻撃挙動が、フィリアを前に解除された。

だが、一瞬遅かった。

機関砲は短時間のみ発射されていた。

フィリアは、何らかの装備を使用した、よう見えた。

彼女の扱う高度テクノロジーの一部は、私ですら理解不能だ。

見えない障壁くらいのものを保有していたとしても、不思議ではなかつた。

フィリアの前面に、空間的な揺らぎが生じた。

銃撃がそこに吸い込まれた。

彼女の扱う高度テクノロジーの一部は、私ですら理解不能だ。まだ生存していることを知つた。私はまだ生きていた。

フィリアの方に目をやる。

「……失敗。ちょっとラグあるなあこれ」

肘から先をもぎ取られた彼女が、痛がるでもなくつぶやいた。

「とりあえず君は一時待機だ」

クレムニクは主機関から火を落とし、頭を垂れた。

フィリアの命令を聞いていたようにしか見えなかつた。

彼女の足下に、Verが心配そうに乗り寄つた。

兵士たちがおつかなびっくり森から出てくる。

「か、彼女は……その姿は……？」

全員がフィリアの姿を見た。

「……失敗。ちょっとラグあるなあこれ」

肘から先をもぎ取られた彼女が、痛がるでもなくつぶやいた。

「とりあえず君は一時待機だ」

クレムニクは主機関から火を落とし、頭を垂れた。

フィリアの命令を聞いていたようにしか見えなかつた。

彼女の足下に、Verが心配そうに乗り寄つた。

兵士たちがおつかなびっくり森から出てくる。

「か、彼女は……その姿は……？」

全員がフィリアの姿を見た。

「……失敗。ちょっとラグあるなあこれ」

肘から先をもぎ取られた彼女が、痛がるでもなくつぶやいた。

「とりあえず君は一時待機だ」

クレムニクは主機関から火を落とし、頭を垂れた。

フィリアの命令を聞いていたようにしか見えなかつた。

彼女の足下に、Verが心配そうに乗り寄つた。

兵士たちがおつかなびっくり森から出てくる。

「か、彼女は……その姿は……？」

全員がフィリアの姿を見た。

「……失敗。ちょっとラグあるなあこれ」

肘から先をもぎ取られた彼女が、痛がるでもなくつぶやいた。

「とりあえず君は一時待機だ」

クレムニクは主機関から火を落とし、頭を垂れた。

フィリアの命令を聞いていたようにしか見えなかつた。

彼女の足下に、Verが心配そうに乗り寄つた。

兵士たちがおつかなびっくり森から出てくる。

「か、彼女は……その姿は……？」

全員がフィリアの姿を見た。

「……失敗。ちょっとラグあるなあこれ」

肘から先をもぎ取られた彼女が、痛がるでもなくつぶやいた。

「とりあえず君は一時待機だ」

クレムニクは主機関から火を落とし、頭を垂れた。

フィリアの命令を聞いていたようにしか見えなかつた。

彼女の足下に、Verが心配そうに乗り寄つた。

兵士たちがおつかなびっくり森から出てくる。

「か、彼女は……その姿は……？」

全員がフィリアの姿を見た。

「……失敗。ちょっとラグあるなあこれ」

肘から先をもぎ取られた彼女が、痛がるでもなくつぶやいた。

「とりあえず君は一時待機だ」

クレムニクは主機関から火を落とし、頭を垂れた。

「いや……違うぞ……そんな義体など存在するはずがない。頭をすげ替えることなど、不可能のはずだ！」

「……アンドロイド、なのか？」

「義体だって。他は生身だよ」

「人間そのものだ……信じられる」

息子は手にした銃をきつく握りしめた。混乱しているようであつた。

「アンドロイドが人を救うとは考えられん……」

周囲に緊迫した空気が漂うのがわかつた。

渓谷街の住人にとって、機械とは脅威と見なすべき存在だ。

人間にまぎれて活動できる機械——アンドロイドが存在する」としたら。

それは人々にとつて恐怖ですらあるのだった。

機関砲でもぎ取られた腕。人間ならショック死や失血死もあるのは、彼女が苦痛の声ひとつあげないことだ。

全員の視線が同時に顔に向かう。

それを目にして、全員が同時に息を呑んだ。

片腕と合わせて顔の一部がえぐり取られ、内部構造が露出している。

未知のテクノロジーをもつても、砲弾を完全には防ぎきれない。

それなかつたのだろう。

「まさか。ただの義体だよ、司令官さん」

「いや……違うぞ……そんな義体など存在するはずがない。頭をすげ替えることなど、不可能のはずだ！」

兵士たちが全員、無意識に銃を握りしめていた。

「……アンドロイド、なのか？」

「義体だって。他は生身だよ」

「人間そのものだ……信じられる」

息子は手にした銃をきつく握りしめた。混乱しているようであつた。

「アンドロイドが人を救うとは考えられん……」

周囲に緊迫した空気が漂うのがわかつた。

渓谷街の住人にとって、機械とは脅威と見なすべき存在だ。

人間にまぎれて活動できる機械——アンドロイドが存在する」としたら。

それは人々にとつて恐怖ですらあるのだった。

た。

「だけどあなたは、段々と僕らの前に姿を見せてくれなくなつた。つれない態度を取られたと思い込んで、ただただ悲しかつた！ 本当は聞きたいことがたくさんあつたんだ！ どんな旅をしてきたのか聞きたかった！ あなたの全てを知りたかった！ きっとみんなも同じ気持ちだつた……だけど、あなたの気遣いがわかつたから……我慢した……」

厳しい環境下で他者からの愛を享受したことのない子供、だつた我々は、殊更に愛情を欲していたことだろう。想像に容易い。自分に依存してしまわないよう、彼女は距離を置いてくれたのだ。それはわかる。

だけど、そんなものは全て理屈に過ぎない。

押し殺してきた感情に嘘はつけない。

それでも、その刺々しい感情をそのまま言葉にはできなかつた。

彼女の優しさを無下にすることなどできるはずない。

「でももういいんだ。あなたは自分の与えられる、一番良いものを受け取られたから。それが本当にわかつたから。僕は最高の気分なんだ！ ありがとうフィリア！」

本当は永遠に付いていきたかった。Verのように。

共に幾山を越え、共に火を囲い、飯を食い、語らい、笑い、遊び、眠り、次の場所を目指して歩き続ける。

あまりにも魅力的で……到底無理なことだつた。

自分が人間であることが憎くて、悔しくなる。

だが……人間だったからこそ、こうして彼女と出会えたのだろう。

だからありつたけの気持ちを込めて、叫んだ。

「ありがとうフィリア!!」

頬が濡れていた。声も震えている。

それでも叫んだ。

「ずっと僕らを導いてくれてありがとう……救ってくれて、助けてくれてありがとう！ あなたのこれから旅に幸あらんことを!!」

「こちらこそ、ありがとうございます」

兵士たちがあっけにとられる中、彼女は笑った。

それは今まで見た中で最高の笑顔だった。

太陽のように強く輝いていた。

それを見られただけで、最高の人生だと思えた。

彼女は最後まで私を導く光そのものだった。

「最後の日までどうか安らかに、レフ」

フィリアとVerは森の奥に向かって歩きだした。

クレムニクが低い音を立てて再起動し、そのあとに忠犬のようにならうに従つた。

兵士たちが叫びをあげて、散り散りに逃げ出す。

私はその場に残つた。

息子が駆け寄ってきて何かをわめいたが、耳に入つてこなかつた。

フィリアの背中を見送つた。

いつまでもいつまでも見送つた。

「さよなら、フィリア」

少女と巨大機械の姿が樹海の闇に消え、振動が感じられなくなるまで、長い間その場に立っていた。

さらに時は流れた。

歴史は半永久的に止まることはない。

いつまでも続していく。これまでのようにな。

だが私の時計は、もうそろそろ止まる頃合いだ。

彼女のその後について、知る者はいない。

だが彼女自身が消えたわけじゃない。

別の時代、別の土地で、新たな物語を紡いでいくことだろう。

関わった者に、鮮烈な印象を残しながら。

人の命は短い。永遠には寄り添えない。

誰が慰めるのだろう。永遠を生きる彼女を。

人類にできることはひとつきりだ。

彼女のために、その偉業を見届ける者が都度現れることを、私は切に願う。

「終のステラ」
Diary of a Faint Hope

2022年9月30日発行

開発 Key
著者 田中ロミオ
デザイン atd inc.

発売 株式会社ビジュアルアーツ
〒531-0073 大阪府大阪市北区本庄西2-12-16VA第一ビル
URL <http://key.visualarts.gr.jp/>

Ver